志雲会東京第一回勉強会
テーマ：「古事記　大国主命の国譲り」　要約（その３）

松田　武

速須佐男命は母である伊邪那美神に会いたいと泣いてばかりいたので、勝手にせい、ということで、伊邪那岐神から追放されてしまいました。そこで、速須佐男命はどうしたでしょうか。今回は速須佐男命と天照大御神の誓約（うけひ）について語りたいと思います。当初は天照大御神の天の岩戸隠れについても語ろうと考えておりましたが、誓約（うけひ）の話が長くなりましたので、岩戸隠れは次回に致します。

その前に、速須佐男命は母である伊邪那美神に会いたいと泣いてばかりいたのでしょうか。速須佐男命は伊邪那岐神の御鼻から生まれたので、母は本来いないのですが、伊邪那美神を母として恋しがります。不思議と言えば不思議な設定です。古事記の作者は何を意図したのでしょうか。

ここから先は筆者の想像です。速須佐男命の号泣は伊邪那岐神が伊邪那美神との約束を破り、醜くなった伊邪那美神を覗き見たことによるものだ、と考えられます。伊邪那美神の口惜しさ、恥ずかしさは計り知れない、と思います。その思いが速須佐男命に受け継がれたのではないか。

天照大御神は太陽神でありますが、女性として描かれております。速須佐男命は地球の霊魂としての使命を持って生まれました。太陽が陽であれば、母なる大地、と言う言葉がありますように地は陰と位置づけられます。陰である地球の統治者が男性となっております。ということは、天照大御神の魂レベルは男性であり、速須佐男命の魂レベルは女性である、ということになろうかと思います。それが速須佐男命と天照大御神の誓約（うけひ）で明らかになります。（注）誓約（うけひ）とは占いの一種です。

５．速須佐男命と天照大御神の誓約（うけひ）

（イ）　速須佐男命の高天原登場

速須佐男命は伊邪那岐神より追放され、伊邪那美神の住む根の堅州国に直ちに向かうかと思われましたが、その前に姉である天照大御神に別れの挨拶としよう、と高天原に上って参られます。そのとき、『乃參上天時、山川悉動、國土皆震』ということで、山川は悉くとよみ、国土は皆ゆれた、ということでした。

このすごい振動を聞いた天照大御神は『我那勢命之上來由者、必不善心。欲奪我國耳』、我が弟が上ってくるということは、きっと善い心からではないであろう。我が國（高天原）を奪おうとしているに違いない、と大変警戒します。そこで、天照大御神は

髪を男子風に変え、弓矢を持ち、完全武装の状態で速須佐男命がやって来るのを仁王立ちで待ちます。この天照大御神のご様子から、天照大御神という女神様は単なる手弱女（たおやめ）ではなく、武勇の精神を秘めた女神様であることが分かります。

（ロ）　天照大御神のご下問

高天原に上がって来られた速須佐男命に対し、天照大御神は『何故上來』なにゆえ上ってきたのか、問いただします。それに対し、速須佐男命は『以爲請將罷往之狀、參上耳。無異心』。まかりゆかんさまを伝えたいと思って参上しました。異心はございませんとお答えになられました。　そしたら、天照大御神は『然者、汝心之清明、何以知』。あなたの清明なる心は如何にして知ることが出来るのかとさらに問い質します。そこで、速須佐之男命は答えます。『各宇氣比而生子』。「うけひ」にて子を生みましょう、と。　（注）宇氣比＝うけひ

（ハ）　誓約

二柱の神は天の安の河（あめのやすのかわ）にて宇氣布時（うけふとき）

（注）“うけひ”がちゃんと“うけふ”ときと動詞形になっています。

まず、天照大御神が、速須佐之男命が腰に付けた十拳劒（とつかのつるぎ）を三段に折り、天之眞名井（あめのまない）なる清流で清め、劒をかみ砕き、霧のように吹き出します。するとそこに三柱の女神が生まれます。その御名は、

① 多紀理毘賣命（たぎりびめのみこと）またの御名は奥津嶋比賣命（おきつしまひめのみこと）
② 市寸嶋比賣命（いちきしまひめのみこと）またの御名は狹依毘賣命（さよりびめのみこと）
③ 多岐都比賣命（たきつひめのみこと）

であります。これら三柱の女神様は宗像三女神と言われております。

次に、速須佐之男命は天照大御神が髪につけている八尺の勾璁（まがたま）の五百津之美須麻流珠（いほつのみすまる）すなわち五百津（おおくの）勾璁を緒に貫いた長い玉飾りをもらい受け、おなじく之眞名井（あめのまない）の清流で清め、これを口含んで噛み砕き、霧のように吹きだすと、そこに五柱の男神がお生まれになりました。

① 正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命（まさかつあかつかちはやひあめのおしおみみのみこと）　ニニギノ命の父君
② 天之菩卑能命（あめのほひのみこと）　出雲の国造千家（せんげ）家の祖

③ 天津日子根命（あまつひこねのみこと）
④ 活津日子根命（いくつひこのみこと）
⑤ 熊野久須毘命（くまのひすびのみこと）

そこで、天照大御神は速須佐之男命に対して次のようにおっしゃいました。

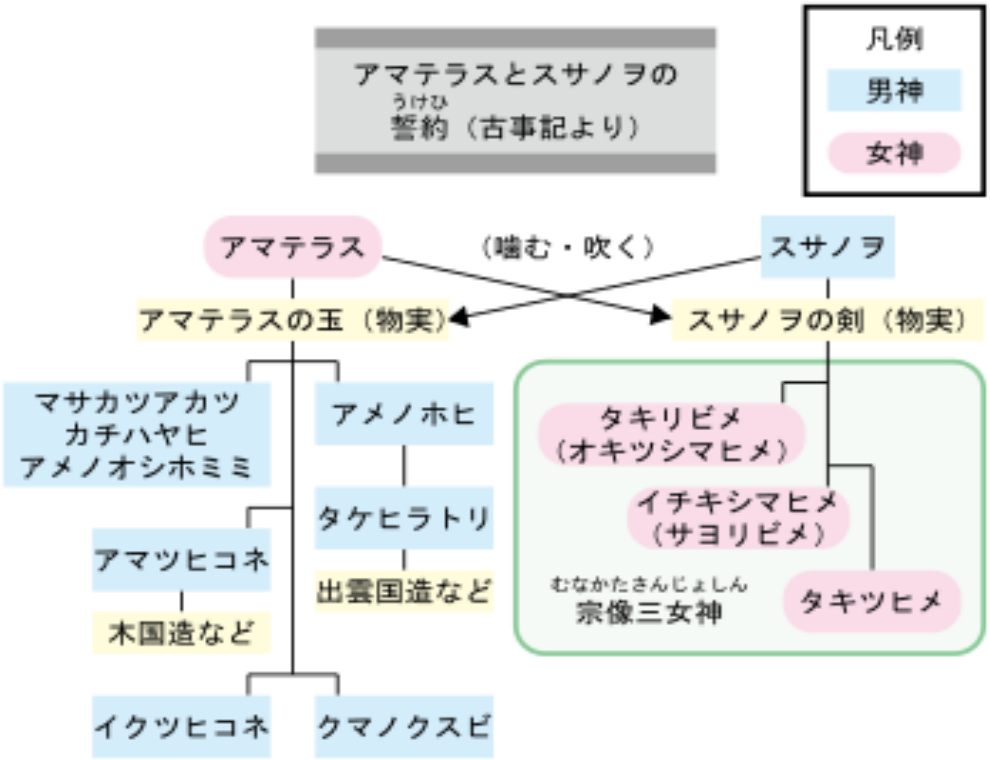
『是後所生五柱男子者、物實因我物所成、故、自吾子也。先所生之三柱女子者、物實因汝物所成、故、乃汝子也。如此詔別也。』

後から生まれた五柱の男の子は私の物である玉を物實（ものざね）から成り出でた神であるから、当然私の子です。先に生まれた三柱の女の子は汝のものである劔を物實(ものざね)にして成り出でた神であるから、汝の子である。

そこで、速須佐之男命は天照大御神に対して

『我心清明、故、我所生子、得手弱女。因此言者、自我勝。』

私のこころは清明です。それ故、私の生んだ子は手弱女だったではありませんか。この勝負は私の勝ちです、と宣言しました。



（注）　タケヒラトリはアメノホヒの子供

（ニ）速須佐之男命の乱暴狼藉

この聖約（うけひ）を行う前に、どういう結果が出たら勝ちとする、ということは決めていませんでした。にもかかわらず、優しい女神が生まれたことにより、これで自分には異心がないことがお分かりでしょう、勝った勝った、と速須佐之男命は騒ぎたてます。

それに対し、天照大御神は何も異論を唱えなかったので、速須佐之男命は図に乗って天照大御神が手ずから作っておられた田んぼに入ってめちゃめちゃにしたり、神聖な御殿でうんこしたり、乱暴狼藉を働きます。それでも、天照大御神は速須佐之男命の行動を良い方に解釈して、庇います。

速須佐之男命が高天原の上って来ると聞いた際、天照大御神は弓矢を取り、劔を佩いて完全武装の状態で速須佐之男命を迎えようとしたにも拘わらず、聖約をした結果、手弱女に戻ってしまわれた。大暴れする速須佐之男命を窘めることもなく、むしろ庇おうとする。いかなる心境の変化であろうか、と考えるのは凡俗の思考。天照大御神は物事を良い方に解釈する、という日本民族本来の性質である清明心を発露された、とみるべきではないであろうか。しかしながら、

『天照大御神、坐忌服屋而、令織神御衣之時、穿其服屋之頂、逆剥天斑馬剥而、所墮入時、天服織女見驚而、於梭衝陰上而死。』

天照大御神が忌服屋（いむはたや）と呼ばれる神聖なる御殿においでなって、神に献上する神衣を機織女に織らせておられました。その時、（速須佐之男命）はそのはたやの屋根に穴を開け、皮を剥いだ天斑馬（あめのふちこま）を投げ入れてしまいます。これを見た機織女は驚き、その拍子に運悪く機織りに使う梭（ひ）で陰処（ほと）を衝いて死んでしまいます。

『故於是、天照大御神見畏、開天石屋戸而、刺許母理此三字以音坐也。』

事ここに及んで、天照大御神は驚き恐れ、天石屋戸（あめのいわやど）を開いて刺許母理（さしこもり）即ちお籠もりになられた。

『爾高天原皆暗、葦原中國悉闇、因此而常夜往。』

ついに、高天原も皆暗く、葦原中國も悉く闇に覆われ、常夜往（とこよゆきし）夜ばかりになってしまいました。

（続く）

ここで疑問が２つあります。

１．　速須佐之男命はなぜ斑駒の皮を剥ぎとって、忌服屋（いむはたや）の屋根に穴を開けて（穿其服屋之頂)、真っ逆さまに投げ込んだのか。
２．　機織女はなぜ　梭（ひ）で陰処（ほと）を衝いて死んだのか。つまり、なぜ梭（ひ）が衝いたのは陰処（ほと）であったのか。

大切な田んぼを荒らしたり、御殿でうんこをする、というようなことは有頂天になった悪戯っ子が、いかにもやりそうなことです。しかし、馬の皮を剥ぎ取る、誰にも気づかれずに忌服屋（いむはたや）の屋根に穴を開ける、同じく誰にも気づかれずに皮を剥いだ馬を屋根の上に持ち上げる、というようなことが容易に出来たとは思えません。出来たとしたら、それは悪戯の範囲をはるかに超えています。古事記の作者は読者に暗に何かを知らせようとしたのではないでしょうか。

先を急がないといけません。この疑問は今後の研究テーマの一つにしたいと思います。ただ言えることは、斑駒の皮を剥ぐ、機織女の死というのは、神道で嫌う穢れ（けがれ）にあたり、天照大御神は怒ると共に、穢れを畏れ、逃げ出したものと考えられます。